

想像力と空想力の区別についての研究

—S.T. Coleridge を中心として—

山下登

(一) はじめに

この研究は想像力説、とりわけ英国における伝統となつてゐる想像力と空想力の区別の歴史の研究であり、又想像力と空想力の区別の現在の評価の一面についての研究である。S. T. Coleridge が立てた想像力と空想力の区別は文学の創作や批評の原理として重要視されて来た。しかし現在において想像力と空想力の区別は美学と心理学の面から対立している様に考えられる。美学の面からは想像力と空想力の区別は猶存在し、意味あるものである。しかし心理学の立場からこの区別は「祝福され」ても「無意味な」ものと説く人が出て来ている。勿論総ての心理学者がそう言つてゐると言うのではない。心理学者の中にもこの区別を認める人もある。心理学者、文学者の I. A. Richards は *Coleridge on Imagination* におつて、Fancy and Imagination の章を設けて心理学としても、又文学としても想像力と空想力の区別が猶有用であると説つてゐる。

しかし古く文学者、Edgar Allan Poe は *Fancy and Imagination* におつてこの区別が無用であると説いてゐる。又文学と心理学の面から研究した Livingston Lowes は *The Road to Xanadu* におつて想像力と空想力の区別は Coleridge が説く様に別個の能力としてではなく、程度の相違による能力と断ずるのである。又 Lowes の説を受け入れて、文学者、心理学者、T. S. Eliot は *The Use of Poetry and the Use of Criticism* におつて想像力と空想力の区別がなく、一つの能力であると説くのである。さうした情勢におつても Basil Willey の様に *Coleridge on Imagination and Fancy* (1946) において、文学の面から想像力と空想力の区別が現在においても猶意味あるものであると説き続ける者もある。現在この問題は左か右か混沌としてゐる。筆者も一応は心理学の面から論理的には

創作の原理として想像力と空想力の区別が無いと言うことに賛意を表するとしても、哲学と美学と文学の面の伝統的立場があり、まだ解決がついていないのであるが、そのままの状態を紹介するより致し方がないのである。

文学者は自己の体験に照して創作の原理を述べるところがあり、人には個性があり、十人十色というところがあり、又それも良いわけであるが、文学の創作の原理として、万人共有の論理でなければならぬ所もある。その様に考えると、想像力と空想力の区別をどの様に落ち着けてよいのか迷うのである。この研究は先にも述べた様に想像力と空想力の区別の歴史の研究を目指すと同時に、想像力と空想力の区別をどの様に考えればよいのか、一つのステップ・ストーンになればと願う次第である。

II

先ず想像力と空想力の区別の歴史を見なければならぬと思うが、最初に想像力と空想力との区別ではないが、世界における最古の想像力説を見たいと思う。次に英国における想像力と空想力の語源とその意味の変遷について大まかに取り上げてみたいと思う。それから想像力と空想力の区別を文学の創作と批評の根本的問題として捕えた英国のロマン主義文学者、S.T. Coleridge の所説について見たいと思う。次に S.T. Coleridge 以前における想像力と空想力の区別されんとする動向について見ることにする。それから、S.T. Coleridge と同時代の英国とドイツの想像力と空想力の区別について見たいと思う。次に S.T. Coleridge の説を受け入れた英国のロマン主義の流れを汲む人達の想像力と空想力の区別について考察する。次に S.T. Coleridge の想像力と空想力の区別に反対した人達について考察する。これは一面において現在における想像力と空想力の区別の考え方の一側面を表すものである。次に又それ

とは反対の人々の想像力と空想力の区別についての考え方を見て結論とすることにする。

(三)

世界における最古の想像力説

英国における想像力と空想力の区別を見る前に、少し世界における最古の想像力説について触れたい。世界において、最初に *imagination* という心理作用が詩に属するとしたのはエスパニヤ人の Huarte De San Juan (1530—1590) である。「超現実主義詩論 西脇順三郎著 荒地出版社、p.20」と言われているが、古くギリシアにおいて、哲学者、Aristotle (B.C. 384-322) は *Parva Naturalia* & *De Anima* において、純粹に哲学的な研究の対象として想像力について述べている。又 Flavius Philostratus (A.D. 240年頃死す) も *Vita Apollonii Tyanensis* において、芸術創作についての構想力について述べている。

「構想力 *Phantasia* とは模倣力 *Mimesis* よりも遙かに巧みな技術者である。模倣力はその見た所のものを芸術において描き出すことができる。構想力はその見ざりし所のものさえも描き出す。何故なら、それは見ざるものものを実在するものからの類推に依りて想像することをするからである。模倣力は屢々（今日の前に見ゆるものに依りて）驚かされ畏れしめるが、構想力は何ものに依りても萎縮せしめられず真向に理想の目標に向って進む。」（「深田康算全集」第一巻、p.211）

と述べて、創作を行うには先ず良く物を観察し、その後、見たものの類推によって、描かんとする理想的な姿へと変えられねばならぬとしている。そしてその過程を経ることが構想力であると言っているが、想像力と言ってもよい

想像力と空想力の区別についての研究（山下）

が、この様な極めて古い時代において、Phantasiaなる語を用いて、現在においても耐え得る様な所説を述べていることは注目すべきである。

四

想像力と空想力の語源とその意味の変遷

古来文学特に詩の創作の方面において、*imagination* や *fancy* は早くから詩の特異的な面として認められていたが、後の時代に見られる様に芸術創作について何等明確な概念が与えられていたのではなかったし、又 *imagination* と *fancy* とは意義におおむね区別されていなかったのである。因みに N.E.D. の古い用語例を調べてみると、英国におおむね最初に使用された *imagination* の用語は A.D. 1340 年の Rolle Richard de Hample (?1290-1340) が聖書の *Psalter* の翻訳におおむね、"……travail my soul in vain ymagynacions. (無益な想像力において我が魂を分悦する) (Chapter XXXVII, 7) と使用したのがその最初である。次に A.D. 1377 年頃に有名な William Langland (?1330-?1400) が夢物語 *The Vision of the Plowman* (1362-77-92) に於いて "No wysdome ne wyse ymagynacion" (智慧も賢く想像力もなご)と用いている。

次に *fancy* はいつ調へて見ると A.D. 1581 年に T. Howell が *Deuises* という作品におおむね、"The Flaming daries, that fancie quickly with quenches fyre" (速みやかに消すことの出来ぬ火を以て空想する炎の投げ矢) (A.D. 1879 年 Press, p. 229) と始めて使用し、A.D. 1632 年頃には Milton が *L'Allegro* の中で、"Sweetest Shakespeare, Fancy's child" (最も甘美なシェクスピア、空想の子供)と述べているが、N.E.D. によつて、我々は英

国に *imagination* の原語 *ymagynacion* が十四世紀頃ラテン語の *imaginatio* から輸入され、他方 *fancy* は十六世紀頃ギリシア語、ドイツ語の *phantasia* から輸入され、両者共に仮象とか幻等の自由奔放に心の中に物の姿を描き出す力としての極めて漠然たる意味に用いられていたに過ぎないのであって芸術創作についての何等明瞭な概念を与えていなかったことが理解されるのである。そしてその後、英国における *imagination* と *fancy* の語は漸次芸術創作における原理の中心的なものとして形成されるのであるが、古典主義時代においては、*imagination* と *fancy* とは意義において区別して用いられていないのみならず、*Wit, Reason, good sense* 等の意義と共に種々混同して用いられていた節がある。そして古典主義時代の反動として浪漫主義的風潮が芽生えて来ると、英国の言語学者、Logan Pearsall Smith (1865-1946) がその著 *Words and Idioms* の中の *Four Romantic Words* (Constable Miscellany, 1927) において指摘している様に、*Classic* に対立する *Romantic* や古典主義時代の芸術論の中核をなすつた *imitation* に対立する言葉、*originality, creation* や古典主義時代の *talent* に対立する言葉、*genius* 等の言葉と共に自由奔放な時代の要請に応じて、新たな価値を付せられた *imagination* の言葉は *fancy* と区別されて、芸術創作或は芸術批評の根本的原理として抬頭することになるのである。それを樹立した人がロマン主義文学者、S.T. Coleridge である。次に S.T. Coleridge の想像力と空想力の区別について考察しよう。

(五)

S.T. Coleridge の想像力と空想力の区別

Samuel Taylor Coleridge (1772-1820) と William Wordsworth (1770-1850) と Robert Southey (1774-1843)

想像力と空想力の区別についての研究 (山下)

と共に湖畔詩人と呼ばれ、最も romantic な精神の持主であり、幻想的にして、神秘的な詩『*The Ancient Mariner* (1798), *Kubla Khan* (1797), *Christabel* (1816) 等の作者として有名であるのみならず、文芸批評の方面においても、当代随一の批評家として仰がれ、その著『*Biographia Literaria* (1817)』と『*Shakespeare's Criticism* (1818)』とはその代表的著述とされている。そしてこの『*Biographia Literaria*』には今筆者がこころづ問題としていふ imagination と fancy との区別についての考えが述べられている。先づ、Coleridge は何時頃から、どの様な動機で imagination と fancy との区別の考えを持つ様になったのであらうか。

Coleridge は一七九六年の秋、後に彼の作詩の無二の親友となる William Wordsworth との二度目の会見をする。その折、彼は Wordsworth から後に『*Lyrical Ballads*, 1798』に載せられた『放浪する女』(『*Female Vagrant*』)によく似た詩、『ノールズヘリ平原での冒険』(『*An Adventure on Salisbury Plain*』)と云う詩を朗読して聞かれ、深く感動し、その時、この詩が如何なる力によって生み出されたかを幾度も瞑想して考えた結果、想像力と空想力という能力を思い付いたと言っている。

“I was in my twenty-fourth year, when I had the happiness of knowing Mr. Wordsworth personally, and while memory lasts, I shall hardly forget the sudden effect produced on my mind, by his recitation of a manuscript poem, which still remains unpublished, but of which the stanza, and tone of style, were the same as those of the “*Female Vagrant*,” as originally printed in the first volume of the “*Lyrical Ballads*.” There was here no mark of strained thought, or forced diction, no crowd or turbulence of imagery...

This excellence...I no sooner felt, than I sought to understand. Repeated meditations led me first to suspect, that fancy and imagination were two distinct and widely different faculties...⁽⁸⁾

〔幸にも私が Wordsworth 氏と個人的に知り合う様になったのは二十四才の時であったが私の記憶の続く限り、或る原稿のままの詩を彼が読んでくれた時、それが私の心に及ぼした突如としての影響は恐らく忘れ得ないであろう。その詩は尚未刊のままになっているが、その各聯の立体の調子は最初 *Lyrical Ballads* の第一巻に収められた *Female Vagrant* のそれと全く同一のものであった。其処には何等の無理な思想や無理な語法と思われる点はなく、又形象が群り騒々しく混雑を来たしているということもなかった。〕

私は彼の詩のこのような特質に感動するや否や、直ちにその何たるかを理解しようとした。反復熟考の結果、先ず私はファンシー (fancy) とイマジネーション (imagination) とは明瞭に、而も甚だしく相違する二つの能力ではなからうかと思うようになった。〕

これは一八一七年に出版された *Biographia Literaria* のなかにおける Coleridge の想像力と空想力の区別を思いついた回想であるが、従って思い付いたのは二十四才の時、一七九六年ということになるが、文献の上で明確に想像力と空想力の区別が載るのは一八〇二年である。Coleridge は W. Sotheby 宛の一八〇二年九月十日付の手紙の中で簡単に想像力と空想力について次の様に述べている。

“Fancy, or the aggregating Faculty of the mind. Imagination, or the modifying and co-ordinating Faculty.”⁽⁹⁾

〔空想力、即ち心の集合的能力。〕

想像力と空想力の区別についての研究 (山下)

想像力、即ち修飾的合着能力。」

空想力は集合的能力であり、想像力は合着能力であるから、Coleridge はここで空想力より想像力は一段高い能力と考えている様であるが、猶明確ではない。

次いで一八〇四年一月十五日付の Richard Sharp 宛の手紙の中で、

“I dare affirm that he will hereafter be admitted as the first & greatest philosophical Poet—the only man who has effected a compleat and constant synthesis of Thought & Feeling and combined them with Poetic Forms, with the music of pleasurable passion and with Imagination or the modifying Power in the highest sense of the word in which I have ventured to oppose it to Fancy, or the aggregating power—in that sense in which it is a dim Analogue of Creation, not all that we can believe but all that we can conceive of creation.”

(「私は Wordsworth が最初の最も偉大な哲学詩人として今後認められるであろうと確信している。喜ばしい情熱の音楽を以て、修飾的能力たる想像力を以て——私が敢えて集合的能力たる空想力と峻別したのだが、——空想力とは創造力の定かならぬ類似物であり、我々は全くそれが創造するのだと信ずることが出来るというのではなく、それが創造するのだと想うことが出来るといった意味のもの——を峻別した言葉の最高の意味での想像力を以て、思想と感情とを完全に、不断に結合させ、融合させ得た唯一の人である。」)

と Wordsworth が他に類を求め得ない勝れた哲学詩人であり、豊かな想像的濃質に恵まれていることを力説しながら、想像力と空想力について言及した。

そして一八一二年には義弟、Robert Southey の編集する雑誌 *Omniana* に

想像力を “shaping and modifying power”⁽⁶⁾

(「形成的、修飾的能力」)

空想力を “the aggregative and associative power”⁽⁷⁾

(「総合的、連想的能力」)

と述べて、始めて想像力と空想力の区別についての考えを出版物として世に出した。一八〇二年には想像力は合着能力であったに対し、一八一二年には形成的能力と述べ、一八〇二年には空想力は集合的能力であったが、一八一二年には連想的能力とつけ加えて十年の間に少し具体的になり、大綱には変りがないが、その推移がうかがえる。

更に一八一七年に *Biographia Literaria* を出版し、その中で比較的詳しく想像力と空想力との区別について述べるのである。では *Biographia Literaria* における想像力と空想力の区別について見てみよう。Coleridge は *Biographia Literaria* 第四章(以下)

“fancy and imagination were two distinct and widely different faculties, instead of being, according to the general belief, either two names with one meaning, or at furthest, the lower and higher degree of one and the same”⁽⁸⁾

(「想像力と空想力とは一般に信ぜられていた様に一つの意味を持てる二つの名称ではなく、或は更に言えば、一つの同じ力の低い、高いといった程度を持てる名称ではなく、二つの別個の、非常に異なる能力である。」)と述べて、想像力と空想力とは程度の相違ではなく、全く別個の創作能力であると述べているのである。

やうして更に Coleridge の *Biographia Literaria* 第十三章の如く述べられてゐる。

“The Imagination then, I consider either as primary, or secondary. The primary Imagination I hold to be the living Power and prime Agent of all human perception, and as a repetition in the finite mind of the eternal act of creation in the infinite I AM. The secondary Imagination I consider as an echo of the former, co-existing with the conscious will, yet still as identical with the primary in the *kind* of its agency, and differing only in *degree*, and in the *mode* of its operation. It dissolves, diffuses, dissipates, in order to recreate: or where this process is rendered impossible, yet still at all events it struggles to idealize and to unify. It is essentially *vital*, even as all objects (as objects) are essentially fixed and dead.

Fancy, on the contrary, has no other counters to play with, but fixities and defines.

The Fancy is indeed no other than a mode of Memory emancipated from the order of time and space; while it is blended with, and modified by that empirical phenomenon of the will, which we express by the word Choice. But equally with the ordinary memory the Fancy must receive all its materials ready made from the law of association.”⁽⁶⁾

(6) それで私は『想像力』を第一のものとして、或は第二のものとして考えてゐる。第一の『想像力』は、全人的知覚の生き生きした力であり、第一の動因であつて、無限なる自己が永遠の創造的行為を有限なる心のうちに再現するものであると考える。第二の想像力とは、自覚的な意志を伴つてゐる前者の反響として、私は考えてい

る。それは、その働きの種類においては第一のものと同じであるが、ただその作用の程度と様式において異なっているだけである。それは再創造するために溶解し、拡充し、拡散するか、あるいはこの過程が不可能にされた場合でも、ともかくそれは依然として理想化し、統一しようと努力する。丁度、すべての物体が(物として)本質的に固定し、生命を持たないと同様、それは本質的に生命を司るものである。

一方、『空想力』とは固定したものと、有限なるもの以外には、弄ぶべき他の相手を持たない。空想力は、実に時間と空間の秩序から解きはなされた記憶の様式に他ならないのである。その間それは『選択』という言葉によって言い表わされる、意志の経験的現象によって結合され、修正される。しかし空想力は普通の記憶と同じくすべて、連想の法則によって用意された素材を受け取らねばならないのである。』

Coleridge は先ず想像力を第一と第二に分け、第一の想像力を一般の人々のものとし、第二の想像力を詩人のものとして区別した。第二の想像力は意識的であると同時に無意識的に働き、第一の想像力より高い活動の程度のものであり、様式において異なっているという。

そして芸術素材を溶解し、拡充し、拡散して再創造する製作過程を指して謂う名前であるという。空想力は時間、空間の秩序から解放された記憶の様式で、連合法則に従って形象が結合されるのであり、想像力と共に芸術創作に必要な能力であると考えた。以上が Coleridge が体系づけようとした想像力と空想力を区別した想像力説の大要であり、当時において全く新しい文学の創作の原理であった。

又 Coleridge は文学の批評、鑑賞の原理として、想像力と空想力の言葉を以て、詩を批評している。Coleridge は彼の作った *Ancient Mariner* が “a work of such pure imagination” (“その様な純粋な想像力の作品”) で

ゆゑとか Coleridge の *Lectures on Shakespeare, ECT.* 中の *Shakespeare, a Poet Generally* に於いて Shakespeare の *Venus and Adonis* の詩の一節が空想力によって出来たものであると云つてゐる。即ち、

“Full gently now takes him by the hand,

A lily prisoned in a jail of snow,

or ivory in an alabaster hand :

So white a friend ingirts so white a foe!”

(「充分にややしく彼女は彼の手を取る、

雪の牢獄の中に囚われたユリの花、或は、

雪花石膏の帯の中の象牙、

非常に白い友が非常に白い敵を取り囲んでゐる。)

Venus と Adonis の手の白きと心の純潔を雪やユリの花や石膏や象牙の白さと対比して、比喩が奇想に富み過ぎて、牽強附会であるから、空想力によって出来たものであると云うのであろう。又

“Milton had a highly imaginative,

Cowley a very fanciful mind.”

(「ミルトンは非常に想像的であり、カウレイは非常に空想的な心を持っていた。)

と述べて、創作の能力としてののみならず、批評、鑑賞の原理として想像と空想を区別して、英国における解釈批評の基礎を築いた。

Coleridge 以前の想像力と空想力の区別

Coleridge が *Biographia Literaria* の第十三章において想像力と空想力とを区別したことを見て来たが、これは彼の独創的見解であるが、それを Coleridge をして区別させる前に、Coleridge に影響を与えたと思われる多くの想像と空想にいつて区別しようとする Coleridge 以前の動向と見解が見られる。これについて詳述したいと思う。

(a)

先づ Thomas Hobbes (1588-1678) はその著 *Leviathan* (1651) の第一部 “*Of Man*” “人間について” の第二章 “*Of Imagination*” “想像力について” において、次の如く述べて、*Imagination* と *Fancy* とを区別すべきことに気が付いてゐる。

“For after the object is removed, or the eye shut, we still retain an image of the thing seen, though more obscure than when we see it. And this is the Latines call *Imagination*, from the image made in seeing; and apply the same, though improperly, to all the other senses. But the Greeks call it *Fancy*.”⁽¹⁾

(つまり、対象がとりさられ、或は目を閉られてのちも、われわれは、そのものの映像^{イメージ}を見てるときよりもあまいであるが、なお保有するのである。それはラテン人が見ることによって生じた像から名を取って映像 *Imagination* と呼んでゐるものであり、不適当ではあるが他のすべての感覚にもこれを適用している。しかし

想像力と空想力の区別についての研究 (山下)

ギリシア人はそれを想像 Fancy と呼ぶ。)』

これによって解る如く、ラテン人が Imagination と呼ぶものを、ギリシア人は Fancy と呼ぶ。Hobbes は Imagination と Fancy との語感が余りにも違つすぎることを指摘したのである。Coleridge は古典の愛好家として Hobbes の *Leviathan* を当然読んでいたと考えられる。

Hobbes の名は Coleridge の *Biographia Literaria* の中にも散見することが出来るが、手紙文や *The Note-books of Samuel Taylor Coleridge* の中にも散見することが出来る。Coleridge が Hobbes を読んだのは一八〇一年の二月から十一月の期間であつたと推定することが出来る。*The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge* の編集者 Kathleen Coburn は同書の脚注におつて、

“The spring and autumn of 1801 seem to have been occupied with his attack of English empiricism.”^馬

(一八〇一年の春と秋がイギリス経験論の彼の (Coleridge の) 攻撃を以つて占められていた様に思える。)と述べているからである。一八〇一年に英国経験論哲学 (Hobbes, Lock, Hulme 等を含む) を読破した様に考えられる。又書簡集によると一八〇一年二月十三日附の Thomas Poole 宛の手紙におつて、Coleridge は Hobbes の連想法則について言及しているし、一八〇一年三月十六日附の同じ Thomas Poole 宛の手紙におつて、Lock や Hulme などと共に Hobbes の名を挙げ、これらの人達の業績が自分の研究の先達であるが、その名声は不当なものであると非難する様な言葉を述べている。^馬 又一八〇一年の四月から十一月の間に記された *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge* によると次の様に記載されている。

“Thomas Hobbes born April 5th 1588—sent to Oxford in his 14th year—published his

1. Transl. of Thuc. 1628.
2. de cive 1646
5. Leviathan 1651
3. de naturâ humanâ 1650
4. de corpore pol. 1650
6. de corpore 1655
7. de homini 1658⁵

5の番号の“*Leviathan*”に注意すべきであると思ふ。5と11の番号の付いているものが、この番号の“*de cive*”の次に来ていることは如何に Coleridge の“*Leviathan*”に対する関心が深かったかを暗に示していると言える。

又6番号の“*de copore*”は一八〇一年四月四日に Carlisle Cathedral Library から借り出している。従つて“*Leviathan*”をその頃読んでいたのではないかと想定される。又特にその“*Leviathan*”の Imagination と Fancy の区別に注意を向けたと思われる。一八〇一年に“*Leviathan*”の名前が挙っているからと言つて、それを読書したとは断定し難いが、多分影響を及ぼしたのではないかと想定される。

(b)

又 Coleridge は Joseph Addison (1672-1719) が“*Spectator*” No. 411 に挙げた *imagination* と *fancy* との区別も古典の愛好家として読んでいた様に考えられる。即ち

想像力と空想力の区別についての研究(山下)

“There are few words in the English language which are employed in a more loose and uncircumscribed sense than those of the fancy and the imagination. I therefore thought it necessary to fix and determine the notion of these two words, as I intend to make use of them in the thread of my following speculations, that the reader may conceive rightly what is the subject which I proceed upon.”^(註)

(「英語のなかでも、空想および想像という言葉ほど、ルーズで無制限な意味に用いられている言葉はすくない。それ故、読者が私のおすすめてゆく主題を正しく受け取れる様に、以下のすじみちにあたって用いようとする二つの言葉の意味を、私はあらかじめ固定し、決定しておくことが必要であると考へた。’) (「スハクテーター」
一七二二年六月二十一日四二一号)

と述べているが如く、Addison は imagination と fancy とを区別しようとしたのである。しかし T.S. Eliot が *The Use of Poetry and the Use of Criticism* に於いて

“Addison starts out to ‘fix and determine’ the notion of the two words; I cannot find any fixing and determining of the word ‘fancy’ in this or the following essays on the subject.”^(註)

(「Addison はこの二つの(imagination と fancy と) 言語の意味を「固定し、決定し」ようとしたのであるが、私は、この中にも、或はこの題目について以下について「ハッセイの中にも、「空想」という言葉のいかなる固定も決定も見出すことが出来ない。’)

と述べているが如く、唯 imagination と fancy とを区別しようとしただけで、実質的には何の区別をもしなかつ

たことが理解出来る。しかし Coleridge の imagination と fancy とを区別しようとする動きだけについて影響を与えたと言える。Coleridge は一八〇一年一月二十八日付の Thomas Poole に宛てた手紙の中で、

“I have lately studied the Spectator—and with increasing pleasure & admiration.”⁽²⁰⁾

〔私は最近スペクテーターを研究した—増してくる喜びと賞讃を以つ。〕

と言っているから、スペクテーターを読んでいたのであるが、多分スペクテーター No. 411 にも目を通していただと想定される。しかし Addison のは imagination と fancy との区別という程でなく、区別すべきことに気がついていただけである。

(e)

次に英国の批評における imagination と fancy との相関的立場の一般の変化が、*Annus Mirabilis* (1667) の様な初期の時代に顕著である。John Dryden (1631-1700) は *Annus Mirabilis* にならぶ次の様に述べている。

“The first happiness of the poet's imagination is properly invention, or finding of the thought; the second is fancy, or the variation, deriving, or moulding of that thought, as the judgement represents it as proper to the subject; the third is elocution, or the art of clothing and adorning that thought, as found and varied, inapt, significant, and sounding words; the quickness of the imagination is seen in the invention, the fertility in the fancy, and the accuracy in expression.”⁽²¹⁾

〔詩人の想像力の第一の喜びは、真の意味での創意、すなわち思想の発見である。そして、第二のそれは、空想力、つまり変化であり、展開であり、主題を適切に表現する判断にしたがって、その思想を形づくることである。〕

想像力と空想力の区別についての研究 (山下)

第三は、雄弁、換言すれば、発見されたままで雑多な思想を、適切に、意味深く、調子の高い言葉で、衣服を着せたり、飾ったりする技術である。想像力の鋭敏さは発明の中に見られ、その豊かさは空想力のうちに、そしてその正確さは表現の中に見られる。」

これによつて、Dryden が詩人の所有する imagination の働きを invention, fancy, elocution の三つに分けて説明を施していることが考察される。しかし今筆者にとつて考察すべきことは imagination と fancy の関係である。Dryden は fancy を imagination と呼ぶ創作能力全体の中に含めるとによつて fancy と imagination との関係を示したのである。このことは英国の批評の推移と Coleridge によつて imagination と fancy とを区別されるまでの前哨的徴候を表わしている。

(d)

次に Shaftesbury (1671-1713) の想像力と空想力の区別によつて John Bullit と W. Jackson Bate の共著である *Distinction between Fancy and Imagination in eighteenth-century English Criticism* (1945) から引用したと思ふ。Shaftesbury は彼の作品 *Characteristic* (1711) に於て「想像力を

“an inherent capacity and guide for admiration, shame, honour, and poetic inspiration.”⁸⁾

(「賞讃と恥らひと名譽と詩的靈感のための天賦の能力と導き。」)

として述べている。又同所において空想についてはオットウェイ (Olway) の *Venice Preserved* (シニスは安泰) の中に書かれている。

“Sea of milk, and ships of amber.”

「牛乳の海、そして琥珀の船。」

が空想であると引用している。これは又 Coleridge が *Biographia Literaria* 第四章 (ed. Shawcross, p. 62) に引用しているものでもある。多分 Coleridge は Otway の *Venice Preserved* より先 Shafesbury の *Characteristic* を読んでいたのではないかと想定される。

(e)

又 Blackmore は *Essays upon Several Subjects* (766-7) に於いて、詩人は、

“an elevated, inventive, and enterprizing Imagination arising from an inborn Fire”

「生れつぎの火から立登る高められた、そして進取の気性に富む想像力。」

を必要とするとか、一方において、

“the Gravity and Chastness of the sublime Stile... will not endure the gay Ornaments of Fancy.”

「崇高な階段の莊重と純潔は空想の快活な裝飾にがまんしないであらう。」

と述べて、想像力と空想力を区別している。又次の様にも述べている。

“Young Men.... may be very capable of works of Invention and Imagination, for Prose-Exercises of Wit and Humour, Sports of Fancy, and declamatory Eloquence.”

「若い人々は機智と諧謔、空想のスポーツ、朗読風の雄弁の散文の訓練の代りに、発明と想像力の働きが全く必要であると言えよう。」

Blackmore は「発明」と「想像力」、「空想」と「スポーツ」を結び合せて、Coleridge の想像力と空想力の区別

想像力と空想力の区別についての研究(山下)

を予表している。

(f)

次に John Bullitt と W. Jackson Bate の *Distinction between Fancy and Imagination in eighteenth-century English Criticism* から William Duff, James Beattie, Dugald Stewart, Piozzi 女史の想像力と空想力の区別の前哨を見よう。先ず William Duff があるが、彼は *Essay on Original Genius* (1767) (独創的天才についての評論)において

「想像力の特性は “Vigor, extensiveness, and plasticity” (*Ibid.*, p. 58) (生氣と広大性と粘性)であり、空想力の特性は “quickness and liveliness” (敏速性と鮮やかさ)である」と述べている。又 “inventive and plastic Imagination”(発明のさして創造的な想像力)は “discloses truth that were formerly unknown” (*Ibid.*, p. 89) (以前知られなかった真理を顯す)。他方、「空想」は「天才」から区別されたものとしての「機智と諧謔」の親である。“the former are produced by the efforts of a RAMBLING and SPORTIVE Fancy, the latter proceeds from the copious effusions of a plastic Imagination” (*Ibid.*, p. 52) (前者(機智)は散歩するやうてスポーツ的な空想力の努力によって生産される。後者(天才)は創造的想像力の言葉の多い吐露から起る。) Coleridge は空想力は “the arbitrary bringing together of things that lie remote” (*Conversation with H.C. Robinson, Miscellaneous Criticism.* (ed. Ransom; pp. 387) (隔って横たわっているものを一緒に任意にまとらす)のようであり、一方想像力は “under excitement generates and produces a form of its own.” (*Ibid.*, pp. 387-8) (刺激の下にそれ自身の形を生み、そして生産する)と述べているが、Duff はそれを予表している。

Duff は想像力は “to present a creation of its own.” (*Essay on Original Genius* pp. 6-7) (それ自身の創造を表わす) ことが出来ることと述べている。しかし空想力は連想と記憶の助けを以て “by the suggestion of some distant, perhaps, but corresponding circumstances” (*Ibid.*, pp. 48-9) (恐らく或る隔たったしかし相当地な環境の暗示によつて) 観念を呼び起す。事実、空想力は “extravagant and lawless” (*Ibid.*, p. 25) (法外なそして無法な) ものである。しかし Coleridge (こゝろこ) も最も良好な状態に、空想力は “aggregative and associative power” (J. Shawcross (ed.): *Biographia Literaria*, Vol. 1, p. 193) (集合的そして連想的な能力) であるが、Duff はおごつて “the proper office of Fancy” (*Essay on Original Genius* pp. 70-1) (空想力のやむを得ない役目) は “is only to collect the materials of composition.” (*Ibid.*, pp. 70-1) (唯作文の素材を集めるに過ぎないのである。)⁽⁸⁾

(8)

次にスコットランド人 James Beattie は *Dissertations Moral and Critical* (1873) (道徳的そして批評的論文) において同じ能力に対して Imagination と Fancy とが両方の言葉を適用しているけれども、区別を指摘して述べている。

“According to the common use of words, Imagination and Fancy are not perfectly synonymous. They are, indeed, names for the same faculty; but the former seems to be applied to the more solemn, and the latter to the more trivial, exertions of it. A witty author is a man of lively Fancy; but a sublime poet is said to possess a vast Imagination. However, as these words are

often, and by the best writers, used indiscriminately, I shall not further distinguish them.⁵⁵

「言葉の普通の使用によれば、想像力と空想力は完全に同義語的なものではない。それらは事実同じ能力のための名前である。

しかし前者はより荘嚴なその行使に適用される様に思われる。そして後者はよりつまらぬその行使に適用される様に思われる。機智に富んだ著者は鮮やかな空想の人である。しかし荘嚴な詩人は広漠たる想像力を所有していると言われる。けれどもこれらの言葉が屢々ある様にそして最良の作家達によって見さかしく用いられているので私は更にそれらを区別しないであらう。」

(h)

Dugald Stewart は *Elements of the Philosophy of the Human Mind* (Edinburgh, 1702) (人間の心の哲学の要素) において想像力と空想力を区別している。空想力は本質的にそして最も適当に働いてゐる時 “a power of associating ideas according to relations of resemblance and analogy.” (*Elements of the Philosophy of the Human mind*, 1792, p. 305)⁵⁶

〔類似と類推の關係に従つて觀念を連想する能力〕である。又次の様にも述べられている。

“the office of this power is to collect materials for the Imagination; and therefore the latter power presupposes the former, while the former does not necessarily suppose the latter. A man whose habits of association present to him, for illustrating or embellishing a subject, a number of resembling or of analogous ideas, we call a man of fancy; but for a effort of imagination, various other

powers are necessary.....”⁸⁵

「この力(空想力)の役目は想像力のために素材を集めることである。そしてそれ故後者の力は前者を予想する。一方前者は必ずしも後者を予備として必要でない。連想の習慣が彼にとって主題を説明し、裝飾するために若干の似ている或は類似の観念を表わす人を我々は空想の人と呼ぶ。しかし想像力の努力のためには色々の他の能力が必要である。」

(i)

Piozzi 女史の *British Synonymy* (1794) (英国同義語)は Coleridge への影響の蓋然性を表わしている。Piozzi は想像力と空想力という言葉について一般的な会話の使用について書き取っている。

“There seems little distinction, yet when they both come to be talked of in a conversational circle, we do say, that Milton has displayed a boundless IMAGINATION in his poem of *Paradise Lost*...

...but that Pope's *Rape of the Lock* is a work of exquisite FANCY.”⁸⁶

〔区別は殆どない。それら両方が会話圏の中で話されるためにやって来た時、我々は言う。ミルトンは彼の失業園の彼の詩の中で果てしない想像力を示して来た。しかしポープの頭髪刈りは精妙な空想力の作品である。〕
以上これらの区別はともかく Coleridge の区別が決して独特なものでないという臆説を保証する十分な適用に達した。彼の心の感受性豊かな同化性ある性格を考えると彼の区別がそれを指すために手近かにあった外的な影響によって触れられなかったということを信ずることは難しい。

(七)

Coleridge と同時代の想像力と空想力の区別

(a)

Coleridge と同時代の想像力と空想力の区別について William Taylor の *British synonyms discriminated* が、彼の次の様に述べている。

“A man has imagination in proportion as he can distinctly copy in idea the impression of sense : It is the faculty which *images* within the mind the phenomena of sensation. A man has fancy in proportion as he can call up, connect, or associate, at pleasure, those internal images (*phantases* is to cause to appear), so as to complete ideal representations of absent objects. Imagination is formed by patient observation ; the fancy by a voluntary activity in shifting the scenery of the mind. The more accurate the imagination, the more safely may a painter, or a poet, undertake a delineation, or a description, without the presence of the objects to be characterised. The more versatile the fancy, the more original and striking will be the decorations produced.”——*British synonyms discriminated*, by W. Taylor.

(「人間は感覚の印象を觀念に明確に複写することが出来る割合に比例して想像力を持っている。それ(想像力)は感覚の現象を心の中で描き出す能力である。人は不在の対象の理想的な表象を完全にするためにそれらの内的な

心像を (*phantasia* は表われせしむることである。) 随意に思い起し、結合し、連想することが出来る割合に比例して空想力を持っている。想像力は描写する力である。そして空想力は喚起する、結合する能力である。想像力は辛抱強い観察によって形造られる。空想力は心の場面を変えることに自発的な活動によって形造られる。想像力が正確であればある程、益々安全に画家や詩人は描写される存在がなくとも記述或は描写を企てることが出来るかも知れない。空想力が多才であればある程、裝飾は益々独創的で、顯著に生産されるであろう。)(*W. Taylor* によって区別された英国の同義語)

この中、想像力と空想力の区別と「随意に思い起し、連想することが出来る割合に比例して空想力を持っている」とか、「空想力は喚起し、結合する能力である」とかの空想力についての言葉は *Coleridge* の空想力の定義に似ている。しかし *Coleridge* は先に見た様に一八二二年に *Omniana* において空想力を定義して「総合的、連想的能力」と述べたのであるから、*W. Taylor* の *British synonyms discriminated* は一八一三年に出版されたので、空想力を連想する能力とする点において、*Coleridge* の方が *W. Taylor* より一年早くことになる。*Coleridge* は一八一七年の *Biographia Literaria* 第四章において、

“Mr. W. Taylor’s recent volume of synonyms I have not yet seen.”

(*W. Taylor* 氏の同義語の最近の書物をまだ見ていないこと。)

と述べているのであるが、彼の友人 *William Wordsworth* が “*Preface to the Edition of 1815*” (一八一五年の詩集の序文) において、*W. Taylor* の同義語の書物の中の筆者が先に引用した想像力と空想力の区別についての部分をそっくりそのまま引用しているので、友人の書いたものであるから、*Coleridge* は一八一五年には *W. Taylor* の

想像力と空想力の区別を読んだかも知れない。勿論 W. Taylor の想像力と空想力の定義は Coleridge のものと異なる点もあるが、Coleridge は *Biographia Literaria* を一八一五年頃執筆した時 W. Taylor の定義が自分のものと異なる点において自分の考えに一層自信を持ち、勇気づけられたかも知れない。しかしそれは臆測を出でない。しかし同時代における両者の類似は興味深い。

(b)

次に想像力と空想力の区別についての Coleridge と同時代のものとしてハイムの Jean Paul Richter (1763-1825) の *Vorschule der Aesthetik* (1804)（「美学入門」）における Einbildungskraft と Phantasie との区別が挙げられる。Vorschule der Aesthetik は Leipzig 大学で行われた公開講演録であったが、Jean Paul はその第一部第二章 'Stufenfolge poetischer Kräfte「詩作能力の段階」」において Einbildungskraft と Phantasie とを区別して次の様に述べている。

“ Einbildungskraft

Einbildungskraft ist die Prose der Bildungskraft oder Phantasie. Sie ist nichts als eine potenzierte heffarbigere Erinnerung, Welche auch die Thiere haben, weil sie träumen und weil sie fürchten. Ihre Bilder sind nur zugefolgne Abblatterungen von der wirklichen Welt; Fieber, Nervenschwäche, Getränke können diese Bilder so verdicken und beteiben, daß sie aus der innern Welt in die äubere treten und darin zu Seibern erstärren.

Bildungskraft oder Phantasie

Aber etwas Höheres ist die Phantasie oder Bildungskraft, sie ist die Welt: Seele der Seele und der Elementargeist der übrigen Kräfte; darum kann eine große Phantasie zwar in die Richtungen einzelner Kräfte, z. B. des Witzes, des Scharfsinns u. f. w. Abgegraben und abgeleitet werden, aber keine dieser Kräfte lässt sich zur Phantasie erweitern. Wenn der Witz das Hieroglyphen Alphabet der selben, wovon sie mit wenigen Bildern ausgesprochen wird. Die Phantasie macht all Theile zu Ganzen—statt daß die übrigen Kräfte und die Erfahrung aus dem Natur buche nur Blätter reißen—und alle Weltheile zu Welten, sie totalisirt alles, auch das unendliche all;”

(一) 想像力

想像力 (Einbildungskraft) は形成力の、或は空想の散文である。想像力は、動物が夢を見たり、恐れたりするが故に、動物も又所有する有力な潑刺たる記憶以外の何物でもない。

想像力の形象は現実の世界から飛びゆく落葉に過ぎない。熱病者や神経衰弱者や酒飲家が内的世界から外的世界に歩み、その中で凍死する程にこれらの形象を色濃く、鮮やかにすることが出来る。

形成力 (Bildungskraft) 或は空想 [Phantasie]

しかしより高次のものは空想或は形成力である。それは世界である。霊の霊である。その他の能力の元素精霊の如きものである。それ故に偉大なる空想は実に個々の能力、例えば、機智、明察等の能力に向つて掘り下げ、導くことが出来る。機智が天然の遊技的な字母の転置であるなら、空想は僅かの形象を以て表現し得る天然の象形文字である。空想はあらゆる部分を全一なものとする。——その他の能力や経験が天然の書物から唯花卉を引

きちぎるに過ぎないのに対して、そしてあらゆる世界の部分を世界へ。それはあらゆるものを全体に統一する。又無限の全一に統合する。』

Jean Paul Richter が Einbildungskraft (想像力) と言っているものは「記憶」を扱うものであり、Colridge の記憶を扱う能力、Fancy (空想力) と同じものである。そして Colridge の Imaginrtion (想像力) は「ともかくそれ(想像力)は理想化し、統一しようと努力する」と述べているが、Jean Paul Richter にあっては Bildungskraft oder Phantasia (形成力、或は空想) は「あらゆる部分を全一なものとする。……そしてあらゆる世界の部分を世界へ。それはあらゆるものを全体に統一する。又無限の全一に統合する。」と述べて、Colridge の Imagination (想像力) と同一のものである。Jean Paul Richter は Bildungskraft oder Phantasia (形成力或は空想) を Einbildungskraft (想像力) より高次のものとしたが、Colridge にあっては Imagination (想像力) が Fancy (空想力) より高次のものとした。従って、語源的にドイツ語の Einbildungskraft に英語の Imagination を Phantasia に Fancy を当てはめれば、Colridge と Jean Pau Richter との想像力と空想力の区別は用語と意味の内容において全く逆である。

Coleridge が Imagination を高次の能力とするに反して Jean Paul Richter は Phantasia を高次の能力とするからである。しかしこのことについて Coleridge にとって重要であったのは Jean Paul Richter の Einbildungskraft とか Bildungskraft とか Phantasia という言葉、言うなれば、言葉の記号とも言うべきものが大切であったのではなく、寧ろ一方が記憶を扱う能力であり、他方が「無限の全一に統一する」能力である意味の方であった。そして Coleridge は自分の Imagination (想像力) という言葉の意味が Jean Paul Richter の Phantasia (空想) に相当

「Jean Paul Richter の Einbildungskraft (想像力) が Coleridge の Fancy (空想力) という言葉の意味に相当することが、Jean Paul Richter とは Coleridge が意見を異にしている点で、Coleridge は一層勇氣すけられ、自分の考えが独創的なものであることを確信したと思われる。勿論先に述べた様に Coleridge は一八〇二年九月十日付の手紙の中で、「空想力、即ち集約的能力、想像力、即ち修飾的合着能力」と述べているから、想像力を空想力より重く早くから見つめたので、Jean Paul Richter の *Vorschule der Aesthetik* は一八〇四年に出版されたのであるから、Coleridge の方が区別することにおいては一八〇二年の手紙文の日付が正確であるとすれば、Jean Paul Richter より二年早かったと言ふことが出来る。しかし Coleridge が Jean Paul より影響を受けたと言ふことはあり得ることである。又多くの学者が認めるところである。Coleridge が想像力と空想力の区別をより詳細に説くのは一八一七年出版の *Biographia Literaria* においてであるから、一八〇四年に出版された Jern Paul Richter の *Vorschule der Aesthetik* の影響を受けたと言ふことはあり得ることである。Coleridge は一八一七年十二月十三日付の J.H. Green 宛の手紙の中で、

“I have but merely looked into Jean Paul's *Vorschule d. Aisthetik*. [sic]”

〔私は Jean Paul の *Vorschule d. Aisthetik* をほんの一冊のぼつたに過ぎない。〕

と述べているが、Alois Brandl と Samuel Taylor Coleridge *und die englische Romantik* (1886) に於いて Coleridge が一八一一年頃 Jean Paul Richter の *Vorschule der Aesthetik* を読んでいたと推定を下している。即ち、

“That he was then well acquainted with the ‘*Vorschule*’ is shown by a remark made to Robinson,

想像力と空想力の区別についての研究 (山一)

29th January, 1811, that the fools played the same part towards Shakespeare's play as Chorus did in the old Greek tragedies; for Jean Paul makes the same remark; and the same idea can hardly have occurred independently to two different men. But what he especially gathered from the 'Vorschule' was the distinction between the power of conception in the "lower sense, which is fancy, and that in the higher sense, which is imagination"⁸⁷”

（彼（Coleridge）がその場合 'Vorschule' をよく知っていたことは古くギリシヤ悲劇において、合唱が為した様に、シエクスピアの劇のために道化が同じ役割を演じていたという一八一一年一月二十九日のロビンソンに対して為された評言によって示されている。というのはジャン・パウルは同じ評言をしている。そして同じ考えが二人の異なった人に独立に起ったということは殆どあり得ない。彼が 'Vorschule' から集めたものは「空想であるより低い意味」における概念の能力と「想像力であるより高い創造的な意味」における概念の能力との区別であった。）

その外、多くの学者が影響を認めている。

④ Laura Johnson Wylie: *Studies in the Evolution of English Criticism* (1894)

“His criticisms shows everywhere the traces of Richter's influence. Not only did he draw from *Die Vorschule der Aesthetik* (1804-1812) such fundamental ideas as the distinction between imagination and fancy, but……”⁸⁸

（彼（Coleridge）の批評はあらゆる處でリヒターの影響を示している。彼は *Die Vorschule der Aesthetik*

(1804-1812)「美学入門」から想像力と空想力の区別の如き基本的な考えを引いているのみならず云々。)

⑧ Logan Pearsall Smith: *Words and Idioms* (1925); *Four Romantic Words*.

“Brandl, in his *Life of Colridge*, says that Coleridge derived the distinction he made between Genius and Talent from his reading of Jean Paul Richter; and that also the famous distinction between Fancy and “higher and creative” faculty of Imagination was derived from the same source.”

(Brandl は彼の著『*Life of Coleridge*』(以下「C」) Coleridge が Genius (天才)と Talent (才能)との間に立てた区別を Jean Paul Richter の著述の読書からその源泉を得ている。そして又 Fancy と Imagination という『より高次の創造的な』能力との間の有名な区別も同じ源泉からその資料を得ていると述べている。)

⑨ 山川鴻三著『近代英文学における二つの批評の伝統』(1969)

「コウレルリッジが一時その影響を受けたとされる Richter の『輝かしく色づけられた記憶力』としての Einbildungskraft と創造し統一する力としての Phantasie の区別云々」

この様に Coleridge くの Jean Paul Richter の影響を述べる学者がある。Coleridge は Jean Paul Richter の Phantasie と Einbildungskraft との区別を参考にしたと考えられ、Coleridge と同時代の想像力と空想力の区別として Jean Paul Richter の *Vorschule der Aesthetik* は興味深し。

(八)

Coleridge の想像力と空想力の区別を受け継ぐ人々

想像力と空想力の区別についての研究(山下)

想像力と空想力の区別は Coleridge より後に出了た詩人や批評家によって多少の見解の相違はあつても、この区別は首肯され、確認されて来た。例えば Coleridge と同時代の彼の友人、William Wordsworth は一八一五年の詩集の序文において次の様に述べてゐる。

“To the mode in which Fancy has already been characterised as the power of evoking and combining, or, as my friend Mr. Coleridge has styled it, “the aggregative and associative power,” my objection is only that the definition is too general. To aggregate and associate, to evoke and combine, belong as well to the Imagination as to the Fancy; but either the materials evoked and combined are different, or they are brought together under a different law, and for a different purpose.”

(空想力は喚起し、結合する能力として既に特色づけられて来たための様式に、即ち親友 Coleridge が空想力を『総合的、連想的能力』と呼んだ時に、私が反対したのはその定義が余りに一般的であるといふことに過ぎない。集約したり、連想したり、喚起したり、結合することは空想力と同様に想像力にも属している。しかし喚起し、結合する詩の素材を異にしているか、或は詩の素材は異った法則の下に異った目的の為に集められるかである。) Wordsworth はこの様に述べて、Coleridge の一八一二年に *Omniana* という雑誌に載せた説には反対しながらも、想像力と空想力の区別を認め、それを支持してゐるのである。

又その外、創作の能力として想像力と空想力を区別した人に John Keats (1795-1821) がある。Keats は友人 Benjamin Bailey に宛た一八一七年十月八日付の手紙において

“Fancy is the Sails, and Imagination the Rudder”^④

（「空想力は帆であり、想像力は舵である。」）

と述べて、論理としてではなく、極めて簡潔に比喩的表現を以て、詩の創作力としての想像力と空想力を区別している。^⑤

次に William Hazlitt (1778-1830) は *Lectures on the English Poets* (1818) の中の *On Poetry in General* において、想像力説を述べ、特に想像力と空想力について、

“Poetry is in all its shapes the language of the imagination and the passions, of fancy and will.”^⑥

（「詩はそのあらゆる形において想像力と情熱の言語であり、そして空想力と意志の言語である。」）

と述べて、想像力と空想力を区別している様である。外に明確に想像力と空想力を区別した言葉は述べていないが、彼は想像力と空想力の違いが可成隔ったものと考えていた様である。

De Quincey (1785-1859) は一八二三年に出版した *Letter to a young man whose education has been neglected*（教育がなおざりにされて来た若き人への手紙）において、空想力と想像力について次の様に述べている。

“the two words (fancy and imagination) has begun to diverge from each other; the first being used to express a faculty somewhat capricious and exempted from law, the latter to express a faculty more self-determined.”^⑦

（「その二つの言葉（空想力と想像力）は互に分岐し始めていた。最初のものとは何か気まぐれな、そして法から免除された能力を表現するために用いられる。後者はより自己決定的な能力を表現するために用いられている。」）

想像力と空想力の区別についての研究（山下）

又 De Quincey は fancy と同じ言葉の来歴についてノートの中で phantasia から phantasy 韻律上の使用から phant'sy が用いられ、発音における t と t' の字の脱落から phansy となり、やがて fancy が生れたと説明している。⁴³ その外、想像力について 'Anecdots from Richter (リヒターの語録) に於て' Jean Paul Richter の語録を訳して、

"Imagination Untamed by the Coarser Realities of Life,"

(「生活のより粗い現実によってならされない想像力。」)

とか、空想力について、

"Fancy can lay only the past and the future under her copying paper, and every actual presence of the objects set limit to her power: just as water distilled from roses, according to the old naturalists, lost its power exactly at the periodical blooming of the rose."⁴⁴

(「空想力は過去と未来のみを空想力の写す紙の下に横えることが出来る。そして対象のあらゆる現実の現在には彼女の力に枷をかける。丁度古い博物学者に従えばバラから蒸留された水がバラの定期的な開花で正確にその力を失った様に。」)

とか述べている。De Quincey も想像力と空想力が隔ったものと考えていた様である。

それから想像力と空想力についての文献を残した批評家に Leigh Hunt (1784-1890) がいる。Hunt は詩集『空想力と想像力』(*Fancy and Imagination*, 1844) に於て、

"Fancy is a lighter play of Imagination."⁴⁵

「空想力は想像力の軽い働きである。」

とか、

“Imagination belongs to Tragedy, Fancy is to the comic.”⁵⁴⁾

（「想像力は悲劇に、空想力は喜劇的なものに属している。」）

とか述べて、想像力と空想力とを区別している。

又 John Ruskin (1819-1900) の著『近世画家論』(The Modern Painters, 1845-60) の第二卷(1846)の第三章『洞察的想像力について』(Of Imagination Penetrative) において、想像力と空想力とを区別している。

“The fancy sees the outside, and is able to give a portrait of the outside, clean, brilliant, and full of detail. The imagination sees the heart and inner nature, and makes them felt, but is often obscure, mysterious, and interrupted, in its giving of outer detail.”⁵⁵⁾

（「空想力は外側を見る。そして外側の描写をはっきりと、明るく、細かく描くことが出来る。想像力は心と内的性質を見る。そしてそれらを感じさせる。しかし時として曖昧で、神秘的で、そして外側を詳しく描くことが妨げられている。」）

そしてこの想像力と空想力の区別は Coleridge 以来の考え方を踏襲していると言っている。

又 T.E. Hulme (1883-1917) も死後出版された遺稿集『思索』(Speculation, 1924) の中で、浪漫主義の時代に次いで、新古典主義の時代が到来したことを説いた後で、

“fancy will be superior to imagination”⁵⁶⁾

想像力と空想力の区別についての研究(山下)

(「空想力は想像力より勝れている。」)

と述べて、浪漫主義時代において、Imagination が Fancy に優位しているという考え方に對し、新古典主義時代においては逆に Imagination より Fancy の方がより重要であると強調し、浪漫主義時代の芸術觀に對して新古典主義の芸術觀を標榜している。猶注意すべきことは、Hulme の Fancy という言葉は Coleridge の Imagination という言葉の意味に相当すると言ってよく、「構想力」とでも訳すべきである。しかしそれにしても、Hulme が浪漫主義以来の区別に反對したことに對しては兎も角として、Fancy と Imagination という二つの能力を認めていることになっている点においては浪漫主義時代の人達と變りがないと言える。

以上、浪漫主義時代に生れた想像力と空想力の区別とそれを受け継いだ人達を現代まで辿ったわけであるが、これは芸術理論の一つの血脈であり、小文学史の一面を形成していると言ってよい。兎も角、これによって一応 Coleridge 以後の想像力と空想力の区別とその継承と影響が如何なるものであるかを辿ったわけである。

(九)

想像力と空想力の区別に反對する人々

想像力と空想力が二つの能力ではなく、一つの能力であるという考えを導いた人としてアメリカの Edgar Allan Poe (1809-1849) がある。Poe は Coleridge の無二といってよい理解者にして心酔家であったが、詩の創作や批評上の問題で実に多くの影響を受け、色々の面を継承したと言える。

しかし今ここで問題としている想像力と空想力の区別についてのみは彼の創作の体験上、次の如く反對している。

即ち、彼は評論、『空想力と想像力』(*Fancy and Imagination*, 1840) にならば、

“The Fancy.” says the author of the *Ancient Mariner*, in his *Biographia Literaria*, “the fancy combines, the imagination creates.” And this was intended, and has been received, as a distinction. If so all, it is one without a difference; without even a difference of *degree*. The Fancy as nearly creates as the imagination; and neither creates in any respect.”

「老水夫」の著者は彼の『文学的自叙伝』の中へ言っている。『空想力は結合し、想像力は創造する』と。そしてこれは区別として考えられ、受け入れられて来た。例えその様になつていようと、それは区別なき一つのものである。程度の相違ですらない。空想力は想像力と同じ様に創造する。そしてどちらの点においても創造してゐる。(なご。)

又彼は次の様にも述べてゐる。

“The mind of man imagine nothing which has not really existed;.....It will be said, perhaps, that we can imagine a *griffin*, and that a griffin does not exist. Not the griffin certainly, but its component parts. It is a mere compendium of known limbs and feature—of known qualities. Thus with all which seems to be *new*—which appears to be a *creation* of intellect. It is resolvable into the old. The widest and most vigorous effort of mind cannot stand the test of this analysis. we might make a distinction, of *degree*, between the fancy and the imagination, in saying that the latter is the former *loftily employed*. But experience proves this distinction to be unsatisfactory.

想像力と空想力の区別についての研究(山下)

what we *feel* and know to be fancy, will be found still only *fanciful*, whatever be the theme which engages it.”¹⁵⁾

（人間の心は真に存在しないものを何も想像することは出来ない。恐らく、我々はグリフィン（胴がライオンで頭と翼がわしの神話の怪獣）を想像することが出来、そしてグリフィンは存在しないと言われることが出来る。グリフィンは確かになくて、その構成部分が存在する。それは知られている手足や姿の、——知られている性質の単なる要約である。知性の創造であると思われる所の新しいものであると思われる総てについてかくの如くである。それは古きものの中に分解出来る。心の最も広いそして最も精力的な努力もこの分析の試金石に耐えることは出来ない。）

我々は空想力と想像力の間の区別を程度の区別とすることが出来る。後者は高く用いられた前者であると言ふことにおいて。しかし経験はこの区別が不満足なものであることを証明している。我々が空想力であると感じ、知るところのものは尚空想力に従事する主題が何であれ、空想的であるに過ぎないのを見出すであろう。）とも述べて、想像力と空想力の区別に反対している。しかし「想像力は空想力の高く用いられたもの」と述べて、辛うじて程度の差として想像力と空想力の区別を認めている。又空想力は空想力ではなくて、空想的であると、創作の原理としてではなくて、批評、鑑賞の原理として想像と空想の区別を認めていることは興味深い。この様に Coleridge の想像力と空想力の区別に反対したのは Poe が英米文学史上最初の人である。

次に Coleridge の想像力と空想力の区別に対する批判的見解を述べている人にアメリカのハーバード大学の英語英文学教授である John Livingston Lowes がある。彼は一九二七年に『ザナドゥの道』(The Road to Xanadu)

という心理学の見解に基いた劃期的な文学研究の大著を著した。この書物は『想像力の道程による一研究』(A Study by the Ways of the Imagination) という副題が示している様に Coleridge の有名な『老水夫』(The Ancient Mariner) と『クブライ汗』(Kubla Kahn) との二つの詩の素材を求めて Coleridge の残したノートブックを中心に彼の読んだ読書の跡を追跡し、広大な文献を漁り、詩の製作において、Coleridge の想像力がどの様に働き、どの様にしてこの二つの詩が創作されたかを辿った実証的な心理学の見解に基いた、文献による詩の創作過程と創作心理の研究である。特にその文献を扱う数量とそれを処理する科学的方法には驚歎すべきものがあって、二つの詩の心像の出所を探って、当時の航海記、探検記、科学雑誌、新聞等に至るまで追い求め、それらの追求は凡て実証的な蓋然性を持っていて、又この書物の中心的題目である想像力に対する説明にも実証的な強みと手固さを持っている。その説明によれば、Coleridge の読書や自然の観察や人々の会話等から得られた心像は Coleridge の頭脳の奥底に一時の間、忘却とも言うべき意識下の世界、即ち心理学で言う潜在意識として蓄えられ、それからそれらが詩人の詩の製作時の緊張によって、色々の心像が詩人の思うがままに自由に選択され、結合され、洗練され、表現として外界に表出され、詩として定着する、この最初の読書や自然の観察等による心像の獲得から詩としての表現までの詩人の精神の全過程を Lowes は想像力と名づけてゐるのである。ここでは想像力は主に潜在意識、即ち一種の記憶を扱うことになる。従って、筆者がこの論文で問題としてゐる Coleridge の想像力と空想力の区別については Coleridge は想像力は創造する力であり、空想力は記憶を扱う連想力であるという意味のことを述べたが、Lowes にとっては、これはいずれも、詩の創作過程において、一種の記憶を扱う同時に働く一つの能力であり、一つの過程であった。即ち、想像力は連想しながら、創造するのである。そして Lowes は想像力と空想力の区別は別個の能力としての区別でなく、程度

による区別であるとして、次の様に結論づけるのである。

“But I have long had the feeling, which this study has matured to a conviction, that Fancy and Imagination are not two powers at all, but one. The valid distinction which exists between them lies, not in the materials with which they operate, but in the degree of intensity of the operant power itself. Working at high tension the imaginative energy assimilates and transmutes; keyed low, the same energy aggregates and yokes together those images which at its highest pitch, it merges indissolubly into one.”⁵³

(「私は長らくこの研究は想像力と空想力が苟しくも二つの能力ではなく、一つの能力であるという結論へ落ち着かせるといふ感じを持っていた。二つの能力の間にある妥当な区別はそれらが、操作する素材にあるのではなく、操作する能力それ自体の緊張の程度にある。強く緊張している時、想像力は心像を結合させ、変形される。一方、緊張度を低く変ずると、同じ力はその最高度の調整の時に分離することなく一つに合体させ得るその心像をただ呼び集め、一緒にするに留まるのである。)」

この結論は先にも述べた如く、Lowesの文献による実証的な研究方法と、着実な研究の成果から割り出されたものである。Lowesの説は先に見たPoeの説と類似していて、アメリカという同国人の見解に諠と親しさを覚えたのかも知れない。

次に Coleridge の想像力と空想力の区別について批判している人に T.S. Eliot (1888-1965) がある。Eliot は『詩の効用と批評の効用』(The Use of Poetry and the Use of Criticism, 1933) に於いて Coleridge の想像力と空想

力の区別について次の様に言っている。

“Fancy may be “no other than a mode of memory emancipated from the order of space and time”; but it seems unwise to talk of memory in connexion with fancy and omit it altogether from the account of imagination....

There is so much memory in imagination that if you are to distinguish between imagination and fancy in Coleridge's way you must define the difference between memory in imagination and memory in fancy....

You have to forget all about Coleridge's fancy to learn anything from him about imagination.”⁸³

（「空想力は『時間と空間の秩序から解きはなされた記憶の様式に他ならない』かも知れない。しかし記憶に結びつけて空想力を語り、想像力の説明からそれを省略するのは賢明ではない。

想像力のなかには多くの記憶がある。従って、若し Coleridge の様に想像力と空想力を区別しようと思ったら、想像力における記憶と空想力における記憶の相違をはっきりさせなければならない。……

諸君は Coleridge から想像力について何かを学ぼうと思ったら、彼の空想力についての説をすっかり忘れてかからなければならない。）」

と言って、Eliot は想像力と空想力とを別個の能力とする区別を否定し去っている。ここで注意すべきことは Eliot が「想像力の中には多くの記憶がある」と述べて、Coleridge が空想力には記憶を結びつけて考え、想像力には記憶を結びつけて考えなかったのは間違であるとし、Coleridge の想像力と空想力の区別を決定的に否定し去り、それに

ついて強い確信を持っているが、これは筆者が先において見た John Livingston Lowes の『ザナドゥへの道』(The Road to Xanadu) における見解がその大きな支えとなっていることである。Eliot は『詩の効用と批評の効用』(The Use of Poetry and the Use of Criticism) の中でそれについて次の様に言っている。

“as we have learnt from Dr. Lowes's *Road to Xanadu* (if we did not know it already) memory plays a very great part in imagination, and of course a much larger part than can be proved by that book.”⁵⁵

(「私達が Lowes 博士の *Road to Xanadu* から教えられた通り、(いままで知らなかったものと仮定して)記憶は想像力の中で大きな役割を演ずるものであり、勿論、その本によって説明される以上の働きをするのである。」) この様に Eliot は Lowes の『ザナドゥへの道』の研究に目をみはり、賞讃をおしまなかつたのであるが、これによって彼の見解が Lowes 博士の影響であることは大いに首肯し得ることであると思う。

Eliot は Lowes 博士と同じく想像力と空想力も記憶を扱う限りにおいて、Coleridge の区別した二つの能力は一つの能力であると考えていたことが理解される。

以上、Poe, Lowes, Eliot の三人の想像力と空想力との区別についての否定的、批判的見解を見て来たのであるが、これは想像力と空想力の区別に対する近代的な、合理的な評価の一面を代表するものである。

(十)

想像力と空想力の区別が無いという説に反対する人々

先にも述べた様に I.A. Richards は Coleridge on *Imagination* (1934) において、科学的、心理学的に Coleridge の想像力説を研究している。そしてその中の第四章、*Imagination and Fancy* において、心理学的に想像力と空想力の区別を現代においても提認し得るものとして二つの能力について言及している。

又 Basil Willey は *Coleridge on Imagination and Fancy* (1946) において、

“A recent critic has referred to Coleridge’s distinction between Imagination and Fancy as ‘celebrated but useless.’ ‘Celebrated’ we know it to be; its ‘usefulness’, however, cannot be determined without raising some important questions. Are we interested in inquiring into the nature of poetry, and the ways in which it comes to be written? Do we wish to think seriously of poetry as in some sense an approach to truth? Has it any significant relationship with life in general? What place can we give it in our scheme of values? And if we decide that poetry can make a vital contribution to the good life, how can we determine which are the best kinds of poetry? It seems to me that Coleridge’s distinction can be ‘useful’, not by furnishing us with final or explicit answers to such questions, but by deepening and enriching our understanding of their meaning.”

(「最近の批評家は Coleridge の想像力と空想力の区別を『祝福されたしかし無用なもの』として言及して来た。我々はそれが『祝福されたもの』であることを知っている。けれども、その『有用さ』はある重要な問題を投げることなしに決定されることは出来ない。我々は詩の性質と詩が書かれるに至った方法を調べることに興味があるのか。我々は詩について或る意味で真理への近づきとして真面目に考えることを欲するのか。それは一般に生

との何らかの意義ある関係を持っているのか。我々の価値の我々の体系においてそれにどんな場所を与えることが出来るのか。そして我々が詩が良き生活への活発な貢献をすることが出来ると決定するならば、我々は詩の最も良い種類がどちらであるか如何にして決定することが出来るのか。Coleridgeの区別は有用であることが出来る様に私には思える。この様な問題に対して終局的或いは明白な答を供給することによってではなくて、それらの意味の我々の理解を深めそして富ますことによつて。)

と述べて想像力と空想力の区別が現在においても猶有用であると説き続ける。現在において想像力と空想力の区別に対する考えは全く二つに対立していると言える。

しかし思うに先に見た Edgar Allan Poe が *Fancy and Imagination* におつて

“The truth is, that the just distinction between the fancy and the imagination (and which is still but a distinction of degree) is involved in the consideration of the mystic.”

(「本当のことを言うと、想像力と空想力の間の正しい区別は、(それが猶程度の区別に過ぎないとしても)神秘的なものゝの考察の中に含まれる。)

と言っている如く、想像力と空想力の区別は神秘的である。Coleridge は神秘家であつたと言つても過言ではないだろう。

天と地、昼と夜、生と死、男と女などの区別が無数にあり、科学的に一応説明出来るとしても猶神秘的である様に想像力と空想力の区別は神秘的で、美しいとも言える。想像力と空想力の区別は詩の批評の原理、鑑賞の原理として存在することは、Coleridge の *Biographia Literaria* や Leigh Hunt の *Fancy and Imagination* や Edgar

Allan Poe の *The Poetic Principle* (この論文には紙数の関係上、Hunt については詳しくなく、Poe の *The Poetic Principle* については載せなかったが) を読めば解るが、鑑賞の原理として想像と空想の区別があるとすれば帰納的に創作の原理として想像力と空想力の区別は猶存在すると考えることも出来る。筆者は想像力と空想力の区別がないという考えを紹介して来たが、区別があるという考えも留まっていることを述べておきたい。筆者は想像力と空想力の区別が有ると考えてよいのか、無いと考えた方がよいのだろうか。宗教と科学の様に、二つの考え方は全く亀裂してしまっているのである。想像力と空想力の区別の有無の論争は宗教と科学の対立の論争である。勿論科学者にして宗教を信ずる人も事実あるが、概して科学は宗教の神秘性を剝脱しようとするし、宗教は神秘を留めようとする。想像力と空想力の有無の論争は宗教と科学の戦いである。人は生きてるのであるから、何時かは死するのである。生きている者は生きている限りにおいて、文学、いや宗教は心情的に、又觀念的に必要であると考えられる。宗教と科学は対立ではなく、両立しなければならないであろう。そこに人間の調和と知慧がある。想像力と空想力の区別の有無の論争は科学的に、心理学的に、又文学的に、美学的に、哲学的に、宗教的に対立ではなく、両立への道を摸索しなければならないであろう。最後に、現在では、区別の現代的な考えではないが、想像力と空想力の区別について、鍋島能弘氏の『文体美学』(昭和三十七年)の中の「想像と空想」や R.L. Brett の *Fancy and Imagination* (1969) などが新しい文献であることを紹介しておく度。

- (1) Basil Willey, *Coleridge on Imagination and Fancy*, 1946, p. 1.
- (2) *Biographia Literaria*, ed. J. Shawcross, Oxford, 1954, Vol. I, p. 224.
- (3) *Ibid.*, Vol. I, pp. 58-60.

- (4) *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E.L. Griggs, Oxford, 1956, Vol. III, p. 865.
- (5) *Ibid.*, Vol. II, p. 1035.
- (6) *Biographia Literaria*, Vol. I, p. 193.
- (7) *Ibid.*, Vol. I, p. 193.
- (8) *Ibid.*, Vol. I, p. 60-1.
- (9) *Ibid.*, Vol. I, p. 203.
- (10) *Specimens of Table Talk*, John Murry, 1865, p. 86.
- (11) *Lectures on Shakespeare, ETC.* Everyman Library, 1951.
- (12) *Ibid.*, p. 39.
- (13) ed. J. Shawcross: *Biographia Literaria*, Vol. I, p. 62.
- (14) Thomas Hobbes, *Leviathan*, Oxford, 1958, p. 13.
- (15) *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*, Oxford, 1956, ed. Kathleen Coburn, Vol. II, p. 707.
- (16) *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E.L. Griggs, Vol. II, p. 707.
- (17) *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Kathleen Coburn, Vol. I, Text, 937 C.
- (18) Joseph Addison, *The Spectator*, Everyman Library, 1958, No. 411, p. 277.
- (19) T.S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, Faber and Faber, 1955, p. 60.
- (20) *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E.L. Griggs, Vol. III, p. 281.
- (21) Cf. T.S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, p. 55.
- (22) John Bullit and W. Jackson Bate, *Distinction between Fancy and Imagination in eighteenth century English Criticism*, in M.L.N., (Jan. 1945), pp. 10-1.
- (23) *Ibid.*, p. 11.
- (24) *Ibid.*, p. 11.
- (25) *Ibid.*, p. 11.

- ②⑥ *Ibid.*, pp. 11-2.
 ②⑦ *Ibid.*, p. 12.
 ②⑧ *Ibid.*, p. 12-3.
 ②⑨ *Ibid.*, pp. 12-3.
 ③⑩ *Ibid.*, p. 15.
 ③⑪ *The complete poetical works of William Wordsworth*, Macmillan, 1950, p. 880
 ③⑫ *Biographia Literaria*, ed. J. Shawcross, Vol. I, p. 63.
 ③⑬ Jean Paul Richter, *Vorschule der Aesthetik*, Hamburg, 1804, Vol. I, pp. 31-33.
 ③⑭ *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E.L. Griggs, Vol. TV, p. 793.
 ③⑮ Alois Brandl, *Samuel Taylor Coleridge und die englische Romantik*, Berlin, Verlag von Robert Oppenheim, 1886, p. 335. Lady Eastlake's English translation, 1887, (Haskell House, 1966), p. 316.
 ③⑯ Laura Johnson Wylie, *Studies in the Evolution of English Criticism*, Boston, Ginn & Company, 1894, p. 180.
 ③⑰ Pearsall Logan Smith, *Words and Idioms Four Romantic Words*, Constable, 1948, pp. 111-2.
 ③⑱ 山川健三著「英文詩の発展の歴史」p. 16.
 ③⑲ *The complete poetical works of William Wordsworth*, Macmillan, 1950, p. 883.
 ④⑰ *The Letters of John Keats*, ed. M.B. Forman, Oxford, 1952, p. 52
 ④⑱ *The complete works of William Hazlitt in twenty-one volumes*, ed. P.P. Howe, Vol. V. *Lectures on the English Poets*, Yushodo Booksellers, 1967, p. 8.
 ④⑲ *The Collected Writings of Thomas De Quincy*, ed. David Masson, Adam and Charles Black, 1890, X, p. 72.
 ④⑳ *Ibid.*, X, p. 72.
 ④㉑ *Ibid.*, XI, p. 285.
 ④㉒ *Ibid.*, XI, p. 289.

- 46 Leigh Hunt, *English Critical Essay: What is poetry?* ed. Takeshi Saito, Kenkyusha Co., 1935, p. 77.
- 47 *Ibid.*, p. 98.
- 48 *Modern Painters*, Vol. II, (*The works of John Ruskin*, New York, Thomas Y. Crowell, p. 416.
- 49 T. E. Hulme, *Speculation*, ed. Herbert Read, Routledge, 1924, p. 113.
- 50 Edgar Allan Poe, *Fancy and Imagination*, Everyman Library, 1948, pp. 281-2.
- 51 *Ibid.*, p. 282.
- 52 John Livingston Lowes, *The Road to Xanadu*, Constable, 1951, p. 103.
- 53 T. S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, Faber and Faber, pp. 77-79.
- 54 *Ibid.*, p. 78
- 55 Basil Willey, *Coleridge on Imagination and Fancy*, 1946, p. 1.
- 56 Edgar Allan Poe, *Fancy and Imagination*, Everyman Library, p. 285.